

# 若年層ガ行非鼻音話者のガ行鼻音に対する意識

——岡山大学学生に行った調査の結果から——

中 東 靖 恵

## 要 旨

ガ行鼻音は共通語の地位を占めるが、現在、東京語をはじめ、ガ行鼻音地域において、若年層話者を中心にガ行非鼻音化が急速に進んでいる。ガ行非鼻音化、すなわち、 $[-ŋ-] > [-g-]$  の変化は閉鎖音の体系化を目指す通時的な変化であり、もはやその勢いをとめることはできないだろう。

このような状況の中、ガ行鼻音を今後、国語問題として、また、国語教育・日本語教育の中でどのように扱っていけばよいのか。それに対する一定の答えを出すため、①国語教育・日本語教育におけるガ行鼻音の取り扱い、②若年層話者のガ行鼻音に対する意識、③アナウンサーにおけるガ行鼻音の発音の実態について、調査・研究を行った。本稿では、「②若年層話者のガ行鼻音に対する意識」について、岡山大学文学部に所属する学生30名を対象に行った調査の結果を、ガ行鼻音の発音・聞き取り調査の結果とともに報告する。

調査結果の概略は以下のとおりである。発音調査の結果、インフォーマントは全員ガ行非鼻音話者であった。聞き取り調査の結果、ガ行鼻音と非鼻音の聞き分けは正確にされておらず、全体的にはガ行非鼻音を共通語として正しいとする場合が多かった。また、外来語の場合、撥音が先行するガ行音には鼻音を選択する割合が高かった。意識調査の結果、ガ行鼻音は「やわらかく」「まろやか」で「丁寧」「上品」、また、「伝統的」であると評価されている一方で、「歯切れが悪く」「不自然で」「カッコよくない」と意識されており、ガ行鼻音は伝統的・規範的な音であるとの認識はされているが、それを習得し使用しよ

うとすることには消極的であると言えることができる。また、共通語としてのあり方については、ガ行鼻音・非鼻音のどちらを使っても構わないという意見が大半を占めた。

キーワード：ガ行鼻音、ガ行非鼻音、共通語、若年層話者、意識調査

## 1. はじめに

### 1. 1 ガ行鼻音の現状

ガ行鼻音（鼻濁音）は、従来も、現在も、共通語としての地位を占めている（神保ほか1932、佐久間1963、NHK1951、1958、1966、1985、1998、田中1983など<sup>1)</sup>）。しかし、共通語の母体である東京語において、ガ行鼻音が消滅しつつあることについては多くの報告がある（金田一1967、加藤1983、永田1987、日比谷1988など<sup>2)</sup>）。加藤（1983）によれば、東京都文京区根津において、男性では昭和17年生まれ以降、女性では昭和14年生まれ以降の話者に、語中のガ行子音を鼻音 [ŋ] ではなく、閉鎖音 [g] ないし摩擦音 [ɣ] で発音する者が目立つという。

全国のガ行鼻音の分布状況は、国立国語研究所（1966）『日本言語地図』I によって明らかにされたが<sup>3)</sup>、調査から約40年たった今、ガ行鼻音の非鼻音化は東京語だけでなく、ガ行鼻音地域でも若年層話者を中心に急速に進んでおり（相澤1994、1995、飯豊ほか1982、井上1998、高村1993、馬瀬ほか1993）、今やガ行鼻音は全国的に衰退の一途をたどっている。

若年層話者を中心に見られる全国的なガ行鼻音の衰退・消滅が言われる一方で、ガ行非鼻音地域の若年層話者に、臨時的にはあるが、自由変異としてのガ行鼻音が聞かれることがあるという。名古屋地方においては水谷（1987）の、九州地方においては陣内（1992）の報告がある。しかし、いずれも詳しい調査による裏付けはない。

## 1.2 共通語としてのガ行鼻音

ガ行鼻音はガ行非鼻音よりも伝統的な音声だとされ（神保ほか1932など<sup>4)</sup>、国語教育、日本語教育、また、新人アナウンサーの教育においても、ガ行鼻音が正しい音として教育されている。

国語教育において、金田一（1967）によれば、小学校の国語朗読の指導書の類では、すべてガ行鼻音で発音するように一定しており、ガ行鼻音と非鼻音を対照して指導できるような教授用のレコード<sup>5)</sup>もあるという<sup>6)</sup>。

日本語教育では、国際交流基金（1991、1992）、文化庁（1992）など、日本語音声のテキスト・指導参考書類、それらに付属のカセットテープ教材などではガ行鼻音を採用しているものが多い<sup>7)</sup>。土岐（1986）は、日本語の初級用教科書で音声に関する記述のあるものを14種類選び、比較・検討を行っているが、そこで取り上げた14種の教科書のうち、10の教科書でガ行鼻音を教授項目として採用している<sup>8)</sup>。また、国際交流基金（1992）<sup>9)</sup>は、ガ行鼻音の発音について、日本人でもガ行鼻音を発音できない者が増えていることに触れ、学習者に対しては「ガ行鼻音でも非鼻音でも語の意味には影響しないと指導するように」としながらも、「日本語教師としては、やはり [ŋ] が発音できる方がいい」とする<sup>10)</sup>。

アナウンサーの発音・アクセントの見本として、NHKや各民間放送局、アナウンサー養成講座などで使われているNHK編の『日本語発音アクセント辞典』がある。1943年の初版からこれまで幾度か改訂されてきたが、1985年の『改訂新版』（以下、『NHK1985』と略称）から13年ぶりに改訂され、『新版』（1998）（以下、『NHK1998』と略称）が出版された。この最新版日本語発音・アクセント辞典『NHK1998』でも、従来どおりガ行鼻音が採用されている。同書「資料集・解説」の中には、最近、ガ行鼻音地域においても、若い人々の間でガ行鼻音を使用する人が減っていることを指摘した上で、「ガ行鼻音の持っているまろやかな響きは日本語の発音の美しさの一つであると考える人も多く、現在NHKのアナウンサー教育では鼻濁音の指導をしている」とあ

る<sup>11</sup>。同様の記述は、「全日本の発音とアクセント」(同書「資料集・解説」内<sup>12</sup>)にもあり、ガ行鼻音は「特に柔らかみを感じさせる特徴もあるから、従来共通語音として望ましいものであるとされた」とある。

### 1. 3 日本語史的観点から見たガ行鼻音—ガ行非鼻音化の要因

ガ行鼻音の衰退は、ガ行鼻音 [-ŋ-] からガ行非鼻音 [-g-] へという、日本語の歴史的な音変化であると捉えることができる。井上(1971)は、日本全国における語中ガ行子音の音変化を、言語地理学的・国語史的観点から論じている。それによると、J. Rodriguez(1604-1608)の記述や、高知方言などに見られる入りわたり鼻音を伴った [-~g-] は、1つは、入りわたり鼻音を脱落させ軟口蓋閉鎖音 [-g-] へ<sup>13</sup>、もう1つは、音韻論的な「あきま」である軟口蓋鼻音 [-ŋ-] へという2つの変化の道をたどった。現在、若年層話者を中心に、ガ行鼻音地域においては [-ŋ-] > [-g-] が、また、入りわたり鼻音を伴った古い音 [-~g-] を保っていた地域<sup>14</sup>でも [-~g-] > [-g-] が起こっており、全国で語中ガ行子音は軟口蓋閉鎖音 [g] へ統合されようとしている(井上1998)。

ガ行鼻音地域における [-ŋ-] > [-g-] の変化は歴史的な流れであり、それは日本語有声閉鎖音の体系化を目指す動きでもある。かつて、語中のバ行子音・ダ行子音・ガ行子音は、入りわたり鼻音を伴った [-~b-]、[-~d-]、[-~g-] で発音されていた。のちに、バ行子音・ダ行子音では、入りわたり鼻音が脱落して、それぞれ、[-b-]、[-d-] となったが、ガ行子音は鼻音性を捨て切れず、同じ軟口蓋を調音点とする鼻音系列で、音韻論的な「あきま」であった [ŋ] に入った(下図参照)。なお、バ行子音・ダ行子音の場合には、これらと調音点を同じくする鼻音系列にはすでに [m]、[n] があったため、ガ行子音とは異なり、[-~b-]、[-~d-] は入りわたり鼻音を脱落させ、閉鎖音へと移行した。しかし、これでは、バ行子音・ダ行子音がそれぞれ、[b-, -b-]、[d-, -d-] のように、語頭・語中とも閉鎖音であるのに対し、ガ行子音

		閉鎖音系列	鼻音系列
両唇	[-~b-] →	[-b-]	[-m-]
歯茎	[-~d-] →	[-d-]	[-n-]
軟口蓋	[-~g-] →	[-g-]	[-ŋ-]

は、[g-, -ŋ-]のように、語頭では閉鎖音、語中では鼻音であり、非体系的であった。したがって、[-ŋ-] > [-g-]の移行は、非体系的であるガ行子音を体系化させようとする動きであり、もはやその流れをとめることはできないのである。

ガ行非鼻音化が押し進められている要因として、歴史的な理由のほか、次の理由もあげられる。

1. ガ行鼻音は意味の弁別にはほとんど役立たない。
2. 正書法においてガ行鼻音とガ行非鼻音を書き分ける手段がない。
3. テレビ・ラジオのなどマスメディアの影響。

ガ行鼻音と非鼻音が意味の弁別に役立つ語例として、例えば「銃後」/zjuugo/と「十五」/zjuugo/、「湖岸」/kogan/と「子雁」/kogan/などのミニマル・ペアはある（金田一1967参照）が、その数はそれほど多くない。つまり、語中のガ行子音を鼻音で発音しても非鼻音で発音しても意味に変わりはないという語が大部分を占める。したがって、ガ行鼻音は、語の意味弁別にほとんど役立っていない。

正書法で、ガ行音は、「ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ」のように、「カ・キ・ク・ケ・コ」の右肩に濁点「°」を打って表記される。発音・アクセント辞典類などでは、ガ行鼻音と非鼻音の区別をするために、ガ行鼻音を「ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ」のように表記する場合があるが、この表記は正書法としては認められていない<sup>15</sup>。

全国の若年層話者に見られる急速な非鼻音化は、テレビ・ラジオなどマスメ



ディアの影響によるところが大きいだろう。ガ行鼻音教育を受けているはずのアナウンサーの発音を聞くと、ニュース番組、しかもニュースの原稿読みというかなり改まった場面でさえ、ガ行鼻音を正確に使えるアナウンサーは少なく（馬瀬・渡辺・清水・中東1999）、また、バラエティー番組などでは、ガ行鼻音が聞かれる場合は極めて少ない。テレビ音声が個人の言語に与える影響については、馬瀬（1981、1996）で論じられている<sup>16</sup>。テレビなどのマスメディアから大量に放射されるガ行非鼻音は、歴史的な [-ŋ-] ないし [-~g-] > [-g-] の変化をさらに、そして急速に押し進める強力な力となっているだろう。

#### 1. 4 本稿の目的

このような状況の中、ガ行鼻音を今後、国語問題として、また、国語教育・日本語教育の中でどのように扱っていけばよいのか。それに対する一定の答えを出すため、ガ行鼻音に関する次の3つの調査・研究を行うことにした。

- ①国語教育・日本語教育におけるガ行鼻音の取り扱い
- ②若年層話者のガ行鼻音に対する意識
- ③アナウンサーにおけるガ行鼻音の発音の実態

本稿では、「②若年層話者のガ行鼻音に対する意識」に関して行った調査の結果を中心に報告する。ガ行鼻音を保持しない者が大部分を占める若年層話者において、ガ行鼻音はどのように意識されているのだろうか。同じ若年層話者であっても、ガ行鼻音保持者と非保持者とは、ガ行鼻音に対する意識は違うであろうし、非保持者であっても、両親や祖父母などがガ行鼻音保持者であったり、周辺でガ行鼻音が聞かれる地域に住む者とそうでない者とでも異なるだろう。そして、ある個人がガ行鼻音に対してプラスイメージを持っている場合、たとえ非鼻音話者であっても、ガ行鼻音を身につけ使用しようとするであろうし、マイナスイメージを持っていれば、あえてガ行鼻音を習得することはないであろう。水谷（1987）や陣内（1992）で言われる若年層話者に見られる

自由異音としてのガ行鼻音の使用も、話者のガ行鼻音に対する意識と大いに関係があると考えられる。

なお、ガ行鼻音に対する意識について調査を行ったものに、全国を対象としたNHK（1980）と、九州・関西の大学生を対象とした陣内（1992）がある。NHK（1980）による「ことばに関する意識」調査の結果を見ると、「鼻濁音と濁音のどちらがよいか」の質問に対して、大まかに言えば、東日本（北海道・東北・東京・関東（東京以外）、中部）では鼻濁音（ガ行鼻音）が、西日本（近畿・中国・四国・九州）では濁音（ガ行非鼻音）が支持される割合が高く、東日本と西日本とではガ行鼻音に対する好みに大きな違いがある。陣内（1992）は、ガ行鼻音・非鼻音のイメージを5段階SD法によって調査し、九州と関西という地域差、男女差の観点から分析している。詳細には触れないが、この中で、ガ行鼻音が「東北弁を連想させる」「ひなびた感じ」「田舎的」といった方言的なイメージとして意識されていることは注目される。

本研究では、若年層話者に対して、ガ行鼻音に対するイメージなどを尋ねた意識調査のほか、ガ行鼻音の発音調査、聞き取り調査も行った。対象としたのは、ガ行非鼻音地域の岡山とガ行鼻音地域の東京にある大学に通う学生である。本稿では岡山の結果のみを扱うこととし、東京の大学生に対して行った調査の結果、岡山と東京の調査結果の比較は別稿に譲る。

## 2. 調査の概要

### 2.1 インフォーマント

インフォーマントは、岡山大学文学部に所属する2・3・4年生、合わせて30名<sup>17</sup>（男：4名、女：26名）である。年齢で言うと、20歳前後の若年層話者である。

## 2. 2 調査の方法

### 2. 2. 1 発音調査

発音調査は次のように行った。語中にガ行子音を含む単語、助詞「が」を含んだ短文を示し、インフォーマントに通して2度読み上げてもらい、それらをカセットテープに録音した。

調査語は以下に示す通りである。調査では、これらをランダムに配列して提示した。以下、『NHK1998』に従い、共通語においてガ行鼻音で発音される語、非鼻音で発音される語に分けて示す<sup>18</sup>。

ガ行鼻音：英語、鏡、鍵、影、十五夜、小学校、戦後、ポピュラーソング、  
願いがかなう、本がある

ガ行非鼻音：イギリス、オルガン、カンガルー、高等学校、15、1005

### 2. 2. 2 聞き取り調査

聞き取り調査は次のように行った。語中にガ行子音を含む単語を提示し、ガ行鼻音と非鼻音の2通りに発音したテープを2度流し、共通語として正しい発音だと思う方を選んでもらった。なお、聞き取りができなかった場合を考え、「分からない」という選択肢も用意した。調査語は、発音調査で用いた調査語のうち、単語のみ(14語)を用いた。

### 2. 2. 3 意識調査

意識調査は、大きく、次の項目についてアンケート形式で行った。

- ①日常生活でガ行鼻音を使っているか。
- ②ガ行鼻音の発音は、共通語として正しいと思うか。
- ③これまで、ガ行鼻音について教育を受けたことがあるか。
- ④ガ行鼻音の発音は、非鼻音と比べてどのように感じるか。
- ⑤今後、ガ行鼻音を共通語として使うべきだと思うか、それとも使う必要はないと思うか。また、それはなぜか。



調査は、以上の項目について、選択肢から選ぶ方法、自由に記述してもらう方法により行った。

### 2.3 調査年月

発音調査、聞き取り調査、意識調査はいずれも1999年5月に行った。

## 3. 調査の結果・考察

### 3.1 発音調査

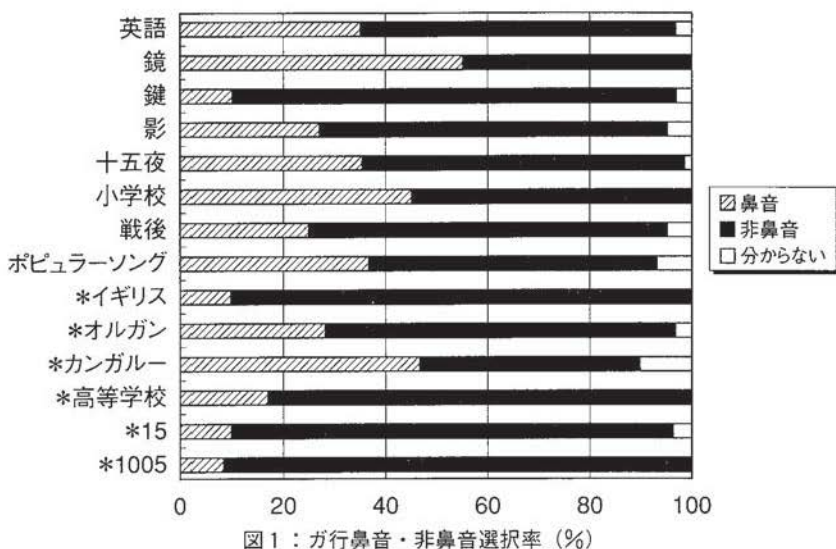
発音調査の結果、調査語のガ行子音を鼻音で発音した者は1名もいなかった。インフォーマントは、ガ行非鼻音地域出身者が大部分を占めるが、ガ行鼻音地域出身者が若干名いる。しかし、発音調査の結果から、今回の調査対象とした若年層インフォーマントは、全員、ガ行非鼻音話者であると言える<sup>19</sup>。つまり、以下で示す聞き取り調査、意識調査の結果は、ガ行非鼻音地域に在住の若年層ガ行非鼻音話者の調査結果ということになる。

### 3.2 聞き取り調査

聞き取り調査の結果を図1に示す。図1の数値は、14の調査語について、ガ行鼻音ないし非鼻音、あるいは「分からない」を選択した割合を示している。なお、ガ行非鼻音で発音される語には\*を付した。

図1を見ると、まず、ガ行鼻音とガ行非鼻音の正確な聞き分けがなされていないことが分かる。そして、語による差はあるが、全体的には鼻音よりも非鼻音の方が支持されている。全語を平均すると、鼻音選択率27.8%、非鼻音選択率69.3%であった。これには、インフォーマントがガ行鼻音を持っていないことが大きく関係していよう。

だが、単語ごとに見ると、「鏡」と「カンガルー」では、わずかではあるが鼻音の数値が非鼻音を上回る。また、鼻音選択率が非鼻音選択率を上回らなく



でも、両者の差が少ない語もいくつかある。インフォーマントがガ行鼻音を持っていないにもかかわらず、鼻音を選択した割合がこれだけ見られるのは、後述（3. 3. 3 以下参照）のように、「ガ行鼻音は、日本語の共通語として正しい音である」といった音声教育を調査実施以前に受けていたこと、そしてそれによってガ行鼻音に対する規範意識が働いたものと考えられる。

ガ行鼻音と非鼻音のミニマル・ペアとして「戦後」と「1005」で、ミニマル・ペアではないが、同じ形態素を含む「十五夜」と「15」、「小学校」と「高等学校」のペアでガ行鼻音の選択率を比較すると、「戦後」25.0% > 「1005」8.4%（差：16.6%）、「十五夜」35.0% > 「15」10.0%（差：25.0%）、「小学校」45.0% > 「高等学校」16.7%（差：28.3%）と、いずれも鼻音を選択した割合はガ行鼻音で発音される語の方が高く、非鼻音選択率との差も大きい。

また、ガ行鼻音で発音される8語と非鼻音で発音される6語で鼻音を選択した割合を比較すると、前者33.6%、後者20.0%とその差は13.6%となる。

最後に、外来語4語について見る。「イギリス」「オルガン」「カンガルー」

「ポピュラーソング」のうち、後者2語はガ行鼻音を選択した割合が40%前後と、前者2語よりも数値が高い。これには、ガ行音の前が撥音「ン」であることが関係していよう。なお、インフォーマントの数人に、「「ン」の後は鼻音になりやすいと思う」や「「ポピュラーソング」の「グ」はガ行鼻音で発音する方が自然のような気がする」といったコメントが見られた。

以上、聞き取り調査の結果から言えることは、ガ行鼻音とガ行非鼻音の聞き取りは正確にできておらず、全体的に見るとガ行鼻音よりも非鼻音を選択する場合が多い。しかし、その割合は語により差があり、ガ行鼻音で発音される語の方が、非鼻音で発音される語よりも鼻音を選択する割合は高く、外来語に関しては、撥音に先行されるガ行音に鼻音を選択する割合が高かった。したがって、全体的に見れば、共通語の発音としてガ行鼻音よりも非鼻音が支持されているが、インフォーマントはガ行鼻音の出現規則を、正確にはないがある程度理解していて、かつ、共通語としてはガ行鼻音が非鼻音よりも正しいという認識も持っていると言っていることができるだろう。

### 3. 3 意識調査

以下では、2. 2. 3に示した5項目についてアンケート形式で行った意識調査の結果を示し、分析する。なお、5項目のうちのいくつかでは、さらに詳しく意見を求めているので、随時示す。

#### 3. 3. 1 日常生活でガ行鼻音を使っているか

日常生活におけるガ行鼻音の使用の意識について、次の4つの選択肢から該当するものを選んでもらった。それぞれの回答人数とともに示す。

- a. ガ行鼻音を使っている。…0名
- b. ガ行鼻音を使っていない。…22名
- c. ガ行鼻音を使うときもあれば、使わないときもある。…4名
- d. 分らない。…4名

大多数が「ガ行鼻音を使っていない」と回答したが、4名ほど「使うときもあれば使わないときもある」と回答している。しかし、4名すべてが単語リスト読み上げ式の発音調査でガ行鼻音を用いていないし、出身地を考えても、日常の会話でガ行鼻音を正しく用いているとは思えない。おそらく、インフォーマント自身、ガ行鼻音を持っていないことを自覚してはいるが、ガ行鼻音に対する規範意識があるため、実際の発音はともかく、ある場合にはガ行鼻音を使用していることもあると意識しているものと考えられる。

なお、「分からない」という回答が4名見られた。語中のガ行子音を [b] と [g] とで使い分けることのないインフォーマントにとって、日常生活でガ行鼻音を使っているかどうかを尋ねられても、意識したことすらない場合も多いだろう。

### 3. 3. 2 ガ行鼻音の発音は、共通語として正しいと思うか

ガ行鼻音が共通語として正しいと思うかどうかに関しては、次の選択肢から該当するものを選んでもらった。それぞれの回答人数とともに示す。

- a. 正しいと思う。…9名
- b. 正しいとは思わない。…3名
- c. 分からない。…18名

「分からない」という回答がインフォーマントの半数以上を占める。この結果は、後で3. 3. 4以下の調査結果と合わせて考える。また、共通語としての地位を支持する者は9名と全体の30%であり、この数値は、聞き取り調査でガ行鼻音を選択した割合（3. 2参照）とも近い。

### 3. 3. 3 これまで、ガ行鼻音について教育を受けたことがあるか

調査時以前のガ行鼻音教育について尋ねたところ、次のような回答を得た。

- a. ある…28名
- b. ない…2名

「ある」と答えた28名に、さらに以下の質問について答えてもらった。

①いつ、ガ行鼻音について習ったか。それはどんな教科で、あるいはクラブ・部活動で習ったか。

②ガ行鼻音について、どのように習ったか。

③ガ行鼻音の教育を受けてから、それをうまく使えるようになったか。

教育を受けた時期については、a. 小学校で、b. 中学校で、c. 高等学校で、d. 大学で、の4つの選択肢から選んでもらい、教科、クラブ・部活動については具体的に記述してもらった。この質問に対して得られた回答を表1に示す。括弧内の数字は回答人数（複数回答あり）である。

表1：ガ行鼻音教育について

時 期	教 科 名	クラブ・部活動など
小学校（5）	音楽（3）、国語（2）	
中学校（1）	国語（1）	
高等学校（4）	国語（2）	校歌の練習時（1） 放送部（1）
大学（28）	言語文化学入門 <sup>a)</sup> （6） 音声学概論（14） 対照日本語学概論 <sup>a)</sup> （10） その他 <sup>a)</sup> （6）	放送部（1）

ガ行鼻音について教育を受けたのは大部分が大学の授業においてであるが、小・中・高等学校でも、インフォーマントの3分の1が音楽や国語の時間にガ行鼻音（という用語は習っていないと思われるが）の教育を受けている。

次に、「ガ行鼻音をどのように習ったのか」の質問について得られた回答を、分かりやすくするためにいくつかの項目に分けて以下に示す。なお、同じ回答が複数名に見られた場合は、その人数を括弧内に数字で示した（以下、同様）。

#### 〈言語学的観点から〉

- 鼻にかけて発音する。



- ・発音記号では [ŋ]、カナでは「ガ」と書く。
- ・ガ行の音を発音するとき、息を口からではなく鼻から抜く。
- ・語中にガ行が来るときは鼻音になる。(3)
- ・語頭には現れない。
- ・「ンガ」を縮めて言う。
- ・ガ行の発音には [g] と [ŋ] があって、意味に変わりはないが、言葉によって発音が違っている。(3)
- ・ガ行鼻音の現れる位置にはルールがある。
- ・「高等学校」というような複合語ではガ行鼻音にならない。

#### 〈共通語として〉

- ・共通語としては、ガ行鼻音のほうが正しい発音とされている。(4)
- ・鼻にかかった音で、共通語として正しいとされている。
- ・ガ行鼻音は美しい日本語の発音とされている。
- ・天皇家では使われる。

#### 〈アナウンサーの発音として〉

- ・NHK のアナウンサーはガ行鼻音で原稿を読むよう教育されている。(3)
- ・アナウンサーが使う。

#### 〈日本語教育において〉

- ・外国人が日本語を学ぶときに、ガ行鼻音を学ぶことも多い。

#### 〈現在のガ行鼻音の実態について〉

- ・最近の若者はあまり使わなくなっている。非鼻音が多い。(2)
- ・最近を使う人が減ってきた。
- ・東京でもほとんど残っていない。

- ・東京でも使われるが、最近は変わってきている。
- ・東京周辺でガ行鼻音はよく用いられるが、関西ではほとんど使われない。
- ・九州では使わない。
- ・岡山人は使えない。

#### 〈ガ行鼻音の印象〉

- ・やわらかい音。
- ・ビジネスで話をする時、ガ行鼻音を使った方がやわらかく聞こえる。

#### 〈大学以前の学校教育において〉

- ・小学校の頃、「ガ行は鼻にかけて歌いなさい」と言われた。
- ・校歌の歌詞の「東（ひがし）」の「が」を「んが」と鼻に抜いて発音するように言われた。
- ・合唱のとき、「ガ」を強く出すのではなく、鼻にかけるように歌うように言われた。
- ・「君が代」を歌う時は、「きーみーんがーよーは」と歌うよう指導された。
- ・ガ行鼻音が発音できるようになるまで、練習させられた。
- ・テキストにガ行鼻音の項があり、クラス全員で発音させられた。

以上を見ても分かるように、回答の多くが、大学の授業で習った内容と思われるが、興味深いのは〈大学以前の学校教育において〉に示した回答である。大学以前の学校教育では、多くの場合、音楽の時間など歌を歌う場合にガ行鼻音を用いるよう指導を受けていることが分かる。また、インフォーマントの中に「小学校の頃、合唱の時、ガ行鼻音の発音がうまくできなくて随分苦労した」というコメントがあったことや、回答の中の「練習させられた」「発音させられた」というような表現からも、ガ行非鼻音話者であるインフォーマント

にとって、ガ行鼻音の教育があまり喜ばしいものではなかったことが窺える。

最後に、ガ行鼻音を教わってから、それをうまく使えるようになったかどうかについて、次の選択肢から該当するものを選んでもらった。

- a. ガ行鼻音を正確に使えるようになった。…1名
  - b. ガ行鼻音を大体使えるようになった。…3名
  - c. ガ行鼻音を少し使えるようになった。…2名
  - d. ガ行鼻音をあまり使えるようにはならなかった。…5名
  - e. ガ行鼻音をほとんど使えるようにはならなかった。…10名
  - f. よく分からない。…6名
- その他：1名

もっとも多いのが、「ほとんど使えるようにはならなかった」であり、「よく分からない」「あまり使えるようにはならなかった」がこれに続き、これらが全体の3分の2以上を占める。なお、「その他」は、「意識すれば発音できるが、普段は使わない」というもので、同じコメントを寄せた者がそのほかにも若干名いた。また、「ガ行鼻音を習ったが、使おうとは思わなかった」というコメントも数名に見られた。

このような否定的な意見とは反対に、肯定的な選択肢 a.、b.、c. を選んだ者も6名と若干認められるが、先の発音調査の結果からも分かるように、正確にガ行鼻音を発音できる者は1名もおらず、教育の成果は見られない。ただし、ガ行鼻音と非鼻音の聞き分けが、少なくとも単語読み上げの場合には、できるという点では、教育の成果は少しはあったと言えるだろう。

### 3. 3. 4 ガ行鼻音の発音は、非鼻音と比べてどのように感じるか

ガ行鼻音を持たないインフォーマントは、ガ行鼻音の発音にどのようなイメージを持っているだろうか。それを調べるため、21の評価語のペアを用意し、5段階評価してもらった<sup>23</sup>。

結果を図2に示す。図の数値は、それぞれの評価語における評価点の平均値

である。なお、評価語はランダムに配列してある。

図2を見ると、数値は、おおまかに、5段階評価の中間である3点以上であるか、それ以下であるかに分けることができる。3点以上の評価語を点数の高い順に見ると、4点以上の「やわらかい (4.47)」「まろやかだ (4.13)」「ほんやりしている (4.03)」、これに、3.5点以上の「伝統的だ (3.97)」「暖かい (3.83)」「丁寧だ (3.80)」「年寄りらしい (3.70)」「上品だ (3.67)」「弱々しい (3.53)」「女らしい (3.50)」が続く(括弧内は評価点。以下、同様)。「やわらかい」「まろやかだ」「ほんやりしている」「弱々しい」という評価には、鼻音であるガ行鼻音と、閉鎖音であるガ行非鼻音との聴覚印象の差が現れたものだろう。そして、このような印象が「丁寧だ」「上品だ」「暖かい」「女らしい」といった評価に繋がっているのであろう。「伝統的だ」「年寄りらしい」という評価には、インフォーマントが調査以前に、ガ行鼻音が非鼻音よりも規範的で伝統的な古い音であるという教育を受けていることが関係していよう。

一方、評価点が3点以下であった評価語を見ると、2.5点以下の「歯切れが悪い (1.83)」「不自然だ (2.33)」「カッコよくない (2.50)」があげられる。「歯切れの悪さ」は、ガ行鼻音の「やわらかさ」「ほんやりさ」という評価の裏返しであると言えよう。「不自然さ」は、インフォーマントがガ行鼻音を持たず、日常生活でも周囲でガ行鼻音を聞くことがないことを考えれば当然であろう。また、「カッコよくない」という評価は、ガ行鼻音が「伝統的」であり、「年寄りが使う」音であると評価されていることから納得できる。

そのほか、ガ行鼻音はどちらかと言えば、「美しく (3.27)」「よい (3.17)」一方、「よそよそしく (2.60)」「嫌い (2.70)」で、「田舎的 (2.73)」であり、「共通語的か方言的か (2.97)」や「TVやラジオでよく聞くかどうか (3.10)」については、どちらとも言えないと評価されていると言えるだろう。

ガ行鼻音は、鼻音であるという音声的特徴から「やわらかく」「まろやかだ」と評価され、さらにそれが「丁寧」「上品」で「暖かい」といった印象に

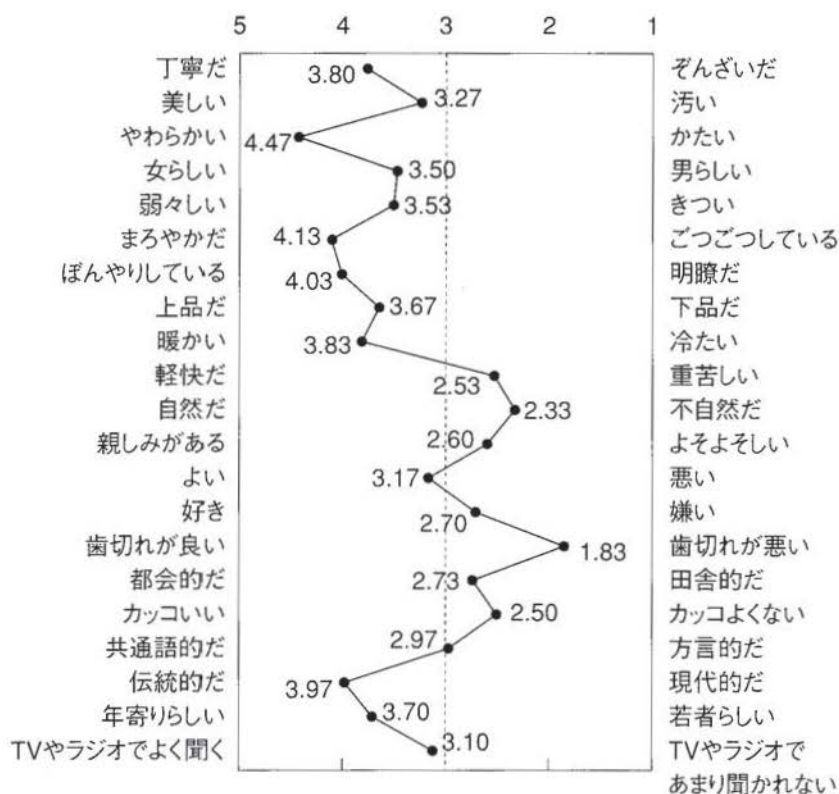


図2：ガ行鼻音のイメージ（5段階評価）

結びついている反面、ガ行非鼻音話者であるインフォーマントにとって、日頃聞くことも使用することもないガ行鼻音は、「よそよそしく」「カッコ悪く」「田舎的」な発音であると意識されている。また、「伝統的」であり「年寄りらしい」発音であるとの意識もあることから、ガ行鼻音に対してプラスイメージを持ちつつも、それを積極的に習得して使用するには至らないと思われる。

以上のような5段階評価のほか、ガ行鼻音についての印象などを自由に記述してもらった。以下にその結果を示す。回答は、大きく、ガ行鼻音に対するプ



ラス評価（支持派）、マイナス評価（不支持派）、どちらとも言えない（中立派）の3つのタイプに分かれる。

#### 〈プラス評価〉

- 聞いていて、「ひっかかりがなく、とげとげしていない」ので、ガ行鼻音を使う人と使わない人とは、その人の第一印象が少し変わると思う。
- アナウンサーや放送部の人たちの話し方は、聞きやすいし、不快なように発音していないと思う。
- 自分はガ行鼻音を使わないので、ガ行鼻音にはあまりなじみがなく、最初は違和感を感じたが、何回か聞いてみるとテレビやラジオで聞かれる発音なので、そちらのほうが共通的なような気がしてきた。
- ガ行鼻音を使えるようになりたい。
- 最近、アナウンサーがガ行鼻音を使わなくなってきたので残念だ。
- ガ行鼻音は聞いていて心地よい。

#### 〈マイナス評価〉

- ガ行非鼻音の方がはっきり聞き取れるので、そちらのほうが正しいと思う。
- 新人アナウンサーがガ行鼻音を意識して発音しているのは、どうも不自然でなじみにくい。
- ガ行鼻音ははっきりしていない。
- 自分にとっては「共通語的」というよりは「方言的」「田舎っぽく」聞こえる。とても不自然だ。使えるようになろうとは思わない。
- 鼻にかかっている、ねちっこくて、あまり快いとは思わない。
- まどろっこしい。
- ガ行鼻音をやたらと用いる先生がいて、それが耳について嫌だった。

### 〈どちらとも言えない〉

- ガ行鼻音を使っているのを聞いても意識していないので、何とも思わない。(2)
- 単語によって違和感のあるものとなないものがある。
- 東北弁っぽいとも思うが、アナウンサーっぽいとも思う。
- 「よい／悪い」「正しい／正しくない」という判断はつきかねる。

### 〈その他〉

- ガ行鼻音を意識できない。(3)
- 非鼻音との区別が難しい。
- ガ行鼻音を意識して聞いたことがない。(2)
- 演歌歌手にガ行鼻音を使っている人が多いと思う<sup>24</sup>。

以上のように、ガ行鼻音に対するイメージはさまざまであるが、ガ行非鼻音話者であるから、ガ行鼻音にマイナス評価が多いかと言えばそうでもなく、「ガ行鼻音を使えるようになりたい」といった意見やガ行鼻音の衰退を嘆くコメントさえ見られる。また、陣内(1992)の報告でも見られたように、岡山大学の学生にも、ガ行鼻音を「共通語」というよりも「東北弁っぽい」「方言的」だと感じている者がいることが分かる。

このように、ガ行鼻音に対するプラスないしマイナスイメージを持つ者がいる一方で、「良い／悪い」あるいは「正しい／正しくない」といった判断はできないといった中立的な立場を取る者や、「意識していない」「何とも思わない」といった無関心な態度を示す者もいる。このことは、5段階評価で、「よい／悪い」「好き／嫌い」「共通語的／方言的」の評価点が中間の3点前後であったことから窺えるが、ガ行鼻音と非鼻音の使い分けのないインフォーマントにとって、ガ行鼻音は特別に意識されることもなく、そのため、「よい／悪い」「正しい／正しくない」といった客観的な判断は下せないということな

のだろう。

3. 3. 5 今後、ガ行鼻音を共通語として使うべきだと思うか、それとも使う必要はないと思うか。また、それはなぜか。

今後、共通語として、ガ行鼻音がどうあるべきかについて、次の4つの選択肢から該当するものを選んでもらった。それぞれの回答人数とともに示す。

- a. ガ行鼻音を共通語として使うべきだ。…1名
- b. ガ行鼻音を共通語として使う必要はない。…6名
- c. ガ行鼻音と非鼻音のどちらを共通語として使っても構わない。…23名
- d. よく分からない。…0名

さらに、それぞれの選択肢ごとに、そのように思う理由を具体的に記述してもらった。以下、選択肢ごとに示す。

- a. ガ行鼻音を共通語として使うべきだ。

- ・「使うべき」と言い切るのには抵抗があるが、ガ行鼻音は聞いていて不快というより快到近いので、ガ行鼻音のほうが共通語としてふさわしいと思う。

- b. ガ行鼻音を共通語として使う必要はない。

- ・ガ行鼻音を不自然に感じられる場合が圧倒的に多いので。
- ・自分が発音できないので嫌だ。
- ・最近アナウンサーでも非鼻音の人が多いらしいので、そのうち非鼻音が共通語になると思うから。
- ・ガ行鼻音を方言として使わない人があるのだから、ガ行鼻音を共通語として使う必要はない。
- ・ガ行鼻音か非鼻音か、どちらかに統一したほうがいい。

- ガ行鼻音は耳につくので嫌だ。アナウンサーが使っているからといって、自分たちが使う必要はない。
  - ガ行鼻音を教育してまで残す必要はない。
- c. ガ行鼻音と非鼻音のどちらを共通語として使っても構わない。
- いずれ、ガ行鼻音か非鼻音かどちらかに統一されるだろうから。
  - 自分自身がガ行鼻音を使っていないので、ガ行鼻音にはあまりなじみがなく、また、非鼻音に汚いという印象もない。
  - 使っても使わなくても、なんのメリットもデメリットもない。気にする必要はない。
  - 自分がガ行鼻音を持っていないし、今さら使おうとも思わない。使っている人は使えばいいし、使えない人は使わなくてもいい。(3)
  - ガ行鼻音が共通語であることは分かるが、自分は使えないので。
  - ガ行鼻音か非鼻音か、どちらを普段使っているか分からないし、両方使っている時もあるのだろうから、どちらかに限定する必要はない。
  - ガ行鼻音、非鼻音のどちらを使っても意味の違いが生じるわけではないので。(12)
  - ガ行鼻音が伝統的であっても、それが現在あまり使われないならば、頑なにそれを守り通す必要はない。
  - 実際にガ行鼻音を発音できない人が多いし、若い人々はあまり使っていないから。(2)
  - 無理してガ行鼻音を使うのはおかしいし、不自然だ。
  - どちらが聞き心地がよいかは人によって違うので、どちらを理想の発音と決めることはできない。
  - たまたまガ行鼻音が東京で使われているから共通語とされているのであって、ある日本の方言音に汚いとかきれいといった基準はないと思う。
  - ガ行鼻音は、共通語としてアクセントほど重要ではないと思う。

- ガ行鼻音と非鼻音の区別はできるが、どちらがおかしいとも思わない。
- ビジネスの場面では使ったほうがいいし、共通語としては使ったほうがよいと思うが、自分は普段使わない。
- ガ行鼻音はやわらかい発音であるが、非鼻音は歯切れがよく、どちらも好きだ。

今後の共通語としてのあり方について、ガ行鼻音でも非鼻音でもどちらを使っても構わないとするものが23名と、全体の約4分の3を占める。また、これについては、3. 3. 2でも「ガ行鼻音は共通語として正しいと思うか」という質問を行っているが、「分からない」と回答した者が18名と全体の6割であり、この問いに対してはどちらとも言えない中立的な立場を取る者が大半を占めることが分かった。

#### 4. ま と め

以上、ガ行鼻音について、岡山大学学生を対象に行った発音調査、聞き取り調査、意識調査の結果を報告した。ガ行鼻音を持たない話者にとって、ガ行鼻音はどのように意識されているかを見ることが本稿の大きな目的であったが、意外にも、ガ行鼻音に対して規範意識やプラスイメージを持っていることが分かった。しかし、規範的・伝統的であるガ行鼻音は、「若者らしさ」や「カッコよさ」からは縁遠いものと意識され、また、インフォーマントが日常耳にすることのない音であることが、「よそよそしさ」や「不自然さ」に繋がり、「方言的」「田舎的」といったイメージと結びついているものと考えられる。

共通語としてどうあるべきかという問いに対しては、ガ行鼻音でも非鼻音でもどちらでもよい、あるいはどちらとも決め兼ねるといった中立的な立場をとる者が大半を占めた。これには、ガ行鼻音が共通語としての規範性を持っていることを知っているが、インフォーマント自身がガ行鼻音を使えないこと、



またそのために、ガ行鼻音と非鼻音の違いを意識することが少ないことが関係しているだろう。

今後、全国的な非鼻音化の傾向がさらに進んでいくことを考えると、ガ行鼻音はだんだんと意識されることが少なくなっていくと思われる。そして、近い将来、共通語としての地位をガ行非鼻音に譲り渡し、ガ行鼻音は一部方言に姿を残すにとどまり、「かつての共通語音声」として認識されるようになるのではないだろうか。

## 5. 今後の課題

今後の課題として、まず、東京の大学生に行った調査の結果を報告し、今回の結果と比較することがあげられる。従来からガ行非鼻音地域であり、日常生活でもガ行鼻音を聞くことがほとんどない岡山と、ガ行鼻音地域であり、ガ行非鼻音が優勢であるとは言え、高年層などにガ行鼻音の聞かれる東京を中心とした首都圏出身・在住の話者とで、ガ行鼻音に対する意識はどのように異なるのか。また、若年層話者でのガ行非鼻音化が見られるとは言え、まだガ行鼻音の盛んな東北地方などでも同様な調査を行い、ガ行鼻音がどのように意識されているのかを調べる必要があるだろう。ガ行鼻音に対する意識は3地域で異なるものと予想されるが、若年層話者として共通する部分もあると考えられる。

今回の発音調査・聞き取り調査は、単語リスト読み上げによって行ったが、テキスト朗読や自然談話における調査も行う必要があるだろう。また、ガ行鼻音のイメージ調査では、ガ行鼻音のイメージだけを尋ね、非鼻音については問わなかった。ガ行鼻音と非鼻音とではほぼ対照的な線を描くと予想されるが、やはり調査を行わなければならないだろう。

今回対象としたインフォーマントは、非鼻音話者とは言え、ガ行鼻音について一定の知識を持った者がほとんどであった。これら一連の調査を、ガ行鼻音の知識のない話者にも行う必要があると思う。また、男子学生数が少なすぎ

たため、男女差を見ることはできなかった。これも今後の課題としたい。

ガ行鼻音が共通語として今後どのようにあるべきかの答えを出すことは、国語問題として、また、国語教育・日本語教育など教育現場での扱いを考える際には欠かせない問題である。しかし、この問題を扱うには、ここで扱った問題だけではなく、「共通語」という概念も含め、さまざまな視点から総合的に判断しなければならないので、ここでは問題提起にとどめておくことにする。

### 【注】

- 1) そのほか、金田一（1967）によれば、東条操「東京語と標準語・特にガ行鼻濁音について」（『放送』11-5）に明言してあるという。
- 2) 東京語においてガ行非鼻音化の傾向が見られ始めていることは、昭和7（1932）年発行の『国語發音アクセント辞典』ですでに指摘されている。また、同書は、近畿地方に見られる非鼻音化傾向についても述べている。
- 3) そのほか、NHK（1966、1985、1998）、柴田（1969）などがある。
- 4) そのほか、金田一（1967）によると、三宅武郎「音韻文法論の問題」（『国語と国文学』13-10）にもその記述がある。
- 5) カセットテープ教材として、田代（1975）などがある。
- 6) ただし、これは30年以上前のことであり、現在の国語教育において音声教育、特にガ行鼻音がどの程度行われているかは定かでない。
- 7) そのほか、日本語のテキストでガ行鼻音について記述のあるものに、E. Jorden（1963）や朴（1989）などがあるが、そもそも日本語音声の解説がなされているテキストは非常に少ない。また、テキストにガ行鼻音を含め、音声の記述が少ない、あるいはまったくない場合でも、それに付属のカセットテープやCD教材の中で、ガ行鼻音を使用しているものがある（国際交流基金1990、土岐ほか1995、海外技術者研修協会1997など）。しかし、録音者がガ行非鼻音話者である場合が多いためであろうが、ガ行鼻音を使用したり使用していなかったり、あるいは、どちらとも取れるような発音のものが多い。
- 8) なお、ガ行鼻音の取り上げ方や解説の仕方は教科書ごとにまちまちのようである。
- 9) 今田滋子著、p.40。
- 10) 1997年秋、平成9年度日本語教育学会秋季大会（於：広島大学）において、「韓国語・台湾語話者の日本語音声の対照研究」のテーマで1頭発表を行った（馬瀬・中東・崔・邱1997）。発表は、韓国語・台湾語母語話者に行った日本語音声調査の結果報告であったが、その調査項目の一つにガ行鼻音が含まれていた。ガ行鼻音の発音・聴解は、韓国語母語話

者・台湾語母語話者の両者にとって難しいものではないが、現在の日本語におけるガ行鼻音の衰退や日本語史的な理由などから、「もはや日本語教育においてガ行鼻音を教える必要はない」との見解を示したところ、土岐哲氏（大阪大学）から「発音までは強要しないが、聞き取りはできるようにしなければならない。なぜなら、現在、その数が少なくなったとは言え、まだガ行鼻音保有者がいるし、鍵 [kaji] と蟹 [kani] などの区別は聞き取りが難しいから」というような意見が出された。発表後、今田滋子氏（広島大学）からも同様な意見が寄せられた。

国外・国内の日本語教育におけるガ行鼻音教育の実態についても調査を行っているが、その結果は別稿で扱う予定である。また、ここでは、日本語教育、特に日本語音声教育を専門とする両名のガ行鼻音に対するご意見を示すにとどめ、この意見に対する反論は、本稿のテーマから離れるため、ここでは触れない。

- 11) 「知っておきたい10の知識 “Q & A”」 p. 12。

- 12) 平山輝男著、p. 139。

- 13) J.Rodriguez (1604-1608) の ‘Barbarismo’ の中に、備前地方方言の特徴として次のような記述がある（土井忠生訳1955、p. 612より）。

g の前の母音は半分の鼻音を以て発音するのであるが、‘備前’ (Bije) のものの発音ではそれを除いてみて、干からびた発音をする。例へば、Tōga (科) の代りに Toga (とが)、Soregaxi (果) などといふ。この発音をするので ‘備前’ (Bijen) の者は有名である。

つまり、備前地方（現在の岡山県）では中世末期、すでに入りわたり鼻音は脱落しており、井上（1998）も、この方言における [-˘g-] > [-g-] の変化が日本で最も早いものであろうとしている。なお、高知県や紀伊半島の一部方言に現在でも入りわたり鼻音を伴った [-˘g-] が行われていることを考えると、地域によって変化の早さに大きな違いが見られることが分かる。

なお、現在の岡山県にガ行鼻音を用いる地域は存在しないが、県南東部の福浦地区（和気郡日生町）にはかつて [ɣ] が存在した。この地域は昭和38年に兵庫県赤穂市に越県合併されたため、岡山県内には [ɣ] の地点がなくなった（虫明1982）。

- 14) このような地域では、バ行子音・ダ行子音も語中に入りわたり鼻音を伴って、[-˘b-]（例：幅 [ha˘ba]）、[-˘d-]（例：肌 [ha˘da]）のように発音される。なお、かつては語頭の濁音も入りわたり鼻音を伴って発音されていたようだ。詳しくは、柴田（1988、1989）を参照されたい。
- 15) ある複数の音について、それらを表記上区別する手段のないことが、その区別を曖昧にする、あるいは失わせることにつながることはそれほど不自然なことではないと思われる。例えば、朝鮮語における母音の長短の音韻論的対立はかつて存在した（例：ㅏ：/nun/雪、/nun/

目)が、その対立は現在の韓国若年層話者で失われているという(梅田1994など)。それには、朝鮮語の表記が両者を区別する方法を持たないことも関係しているのではないだろうか。

- 16) そのほか、馬瀬(1983)、馬瀬・小橋・竹田・中東(1995)があり、これらはいずれも語アクセントの世代的推移とテレビの影響の関係を論じたものである。概略を述べれば、言語形成期にテレビと接触のなかった世代(戦前生まれ)では、個人のアクセントに及ぼすテレビの影響は少なく、言語形成期の途中ないし初めからテレビと接触のある世代(戦後生まれ)ではテレビの影響が大きいと考えられるということである。また、加藤(1983)のガ行鼻音に関する年齢別調査(東京都文京区根津)の結果を見ると、戦後以降出生者において非鼻音[-ŋ]の出現頻度が鼻音[-ŋ̃]を逆転する。馬瀬(1983)などの結果と合わせて考えれば、ガ行非鼻音化にテレビの影響が大きく関与していることは十分考えられることだろう。

- 17) インフォーマントの出身地(言語形成期を過ごした地域)を以下に示す。岡山県:14名、香川県:4名、山口県:3名、広島県:2名、鳥根県、徳島県、兵庫県、大阪府、奈良県、滋賀県、大分県:各1名。

- 18) ガ行鼻音は語中のガ行子音のすべてに現れるわけではないので、ある一定の基準として『NHK1998』を採用した。なお、外来語の語中ガ行子音について、『NHK1998』には、「原語の発音が鼻音のものを除き、原則として非鼻音であるが、日本語に溶け込んでいるものは鼻音で発音してもよい」(『この辞典の使い方』p.5)とある。調査語の「ポピュラーソング」は『NHK1998』の見出し語に採用されていないが、英語 song は[sɔŋ]と発音され、また、「シンガーソングライター」の見出し語もあるので、「ソング」の「グ」をガ行鼻音で発音される語と見なした。

同じ外来語でも、「イギリス」の場合、『NHK1998』には、「イギリス」「イギリス(ジン)」の両方が載る。しかし、『NHK1966』『NHK1985』では、これらはともに「イギリス」となっている。「日本語に溶け込んでいるものは鼻音で発音してもよい」との記述から、鼻音/非鼻音両者の発音が可能であるとも考えられるが、古くからあるポルトガル語出自の「オルガン」(orgão [ɔʁgõ])は非鼻音の表記しか載らない。「イギリス」の原語はポルトガル語の Inglês [ˈiŋɡles] (イギリス人)であるので、ここではガ行非鼻音で発音される語と見なした。なお、『明解日本語アクセント辞典 第2版』には、「イギリス」「オルガン」「カンガルー」のガ行音はすべてガ行鼻音で表記されている。

さらに、外来語のガ行鼻音について言えば、先にあげた「シンガーソングライター」の「シンガー」は英語 singer [sɪŋər]であるので、『NHK1998』の記述に従えば「シンガー」と表記されるべきである。これとは逆に、finger bowl [ˈfɪŋɡər bɔʊl]は「フィンガーボール」であるはずだが、「フィンガーボール」と載る。これらの例からも分かるように、『NHK1998』に載る外来語のガ行鼻音表記はかなり曖昧であると言える。

- 19) 単語リスト読み上げ調査というかなり改まった場面でガ行鼻音が1例も聞かれなかったことを考えると、少なくともここで対象としたインフォーマントについては、通常の談話でガ行鼻音が現れる可能性は非常に低いと考えられる。
- 20) 「言語文化学入門」は、岡山大学文学部言語文化学科所属の学生が、1年次の前期に履修する授業の一つである。
- 21) 「対照日本語学概論」は、岡山大学文学部言語文化学科言語学講座対照日本語学履修コースが1年次生に開講している授業である。
- 22) 「その他」の内訳は、単に「授業で」と回答した者5名と、編入生が以前所属した大学で履修した「秘書の授業で」という1回答である。
- 23) 評価語選定の際には、井上(1977a、b)、陣内(1992)などを参考にした。
- 24) テレビ・ラジオから流れる歌手の歌声を聞いていると、ロック歌手やポップ歌手ではガ行鼻音が聞かれることはほとんどないが、演歌歌手の場合には多く聞かれるように思う。

## 参考文献

### 【論文・著書】

- 相澤正夫(1994)「ガ行鼻音保持の傾向性と含意尺度—札幌市民調査の事例から—」『国立国語研究所報告書107 研究報告集』15、国立国語研究所
- (1995)「富良野市におけるガ行鼻音の動向」『国立国語研究所報告書110 研究報告集』16、国立国語研究所
- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編(1982)『講座方言学7—近畿地方の方言—』国書刊行会
- 井上史雄(1971)「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』86、武蔵野書院
- (1977a)「方言イメージの多変量解析(上)」『言語生活』311、筑摩書房
- (1977b)「方言イメージの多変量解析(下)」『言語生活』312、筑摩書房
- (1998)『日本語ウォッチング』岩波書店
- 梅田博之(1994)「韓国語の母音」『言語研究』106、日本言語学会
- NHK放送文化研究所(1980)「現代人の話しことば」『NHK文研月報』2月号、日本放送出版協会
- (1992)『ことばのハンドブック』日本放送出版協会
- 大石初太郎・上村幸雄編(1975)『方言と標準語—日本語方言学概説—』筑摩書房
- 海外技術者研修協会(1997)『しんにほんごのきそ』I、スリーエーネットワーク
- 加藤正信(1983)「東京における年齢別音声調査」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』文部省科学研究費報告書
- 金田一春彦(1967)「ガ行鼻音論」『日本語音韻の研究』東京堂出版
- 国際交流基金日本語国際センター(1990)『日本語初歩』凡人社



- (1991)『日本語 発音 英語版』凡人社
- (1992)『教師用日本語教育ハンドブック⑥ 発音 改訂版』凡人社
- 国立国語研究所 (1966)『日本言語地図』Ⅰ、大蔵省印刷局
- 佐久間 鼎 (1963)『日本音聲學』風間書房
- 柴田 武 (1969)「ガ行鼻濁音の分布」『言語地理学の方法』筑摩書房
- (1988)『方言論』平凡社
- (1989)「語頭の濁音、その存在と発音」『奥村三雄教授退官記念 国語学論叢』桜楓社
- 陣内正敬 (1992)「地方におけるガ行鼻音意識—関西と九州における大学生アンケート調査より—」『言語文化論究』九州大学言語文化部
- (1996)『地域語の生態シリーズ 地方中核都市方言の行方—九州』おうふう
- (1998)『日本語の現在』アルク
- 高村恵子 (1993)「栃木県鹿沼市方言におけるガ行子音の実態—ガ行鼻音の消失傾向—」『群馬県立女子大学国文学研究』13、群馬県立女子大学国語国文学会
- 田代昇二 (1975)『美しい日本語の発音』創元社
- 田中章夫 (1983)『東京語—その成立と展開—』明治書院
- 土岐 哲 (1986)「音声教育の面から見た教科書」『日本語教育』59、日本語教育学会
- 土岐 哲・関 正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子 (1995)『日本語中級』301—基礎から中級へ—』スリーエーネットワーク
- 永田高志 (1987)「東京におけるガ行鼻濁音の消失」『言語生活』430、筑摩書房
- 日本放送協会 (1958)『NHK 国語講座 発声と発音』宝文館
- 日比谷潤子 (1988)「バリエーション理論」『言語研究』93、日本言語学会
- 文化庁 (1992)『日本語教育指導参考書1 音声と音声教育』大蔵省印刷局
- 馬瀬良雄 (1967)「幼稚園児の発音の実態—4歳児の場合—」『音声の研究』13、日本音声学会
- (1981)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125、武蔵野書院
- (1983)「東京における語アクセントの世代的推移」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』文部省科学研究費報告書
- (1993)「国際化時代の日本語」『国語国文学誌』23、広島女学院大学日本文学会
- (1996)「テレビと地域語の変容」『日本語学』15—10、明治書院
- (1999)「21世紀の『日本語発音アクセント辞典』のために—共通語アクセントをめぐる—」『放送研究と調査』49—3、日本放送出版協会
- 馬瀬良雄・沢木幹栄・柳 真弓 (1993)「放送音声の地域言語に与える影響」佐藤亮一編『東京語音声の諸相(3)』文部省重点領域研究報告書
- 馬瀬良雄・小橋裕恵・竹田由香里・中東靖恵 (1995)「広島市方言における語アクセントの動態」『音声学会会報』210、日本音声学会

- 馬瀬良雄・中東靖恵・崔昇浩・邱明麗（1997）『韓国語・台湾語話者の日本語音声の対照研究』『平成9年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 馬瀬良雄・渡辺喜代子・清水千寿子・中東靖恵（1999）『現代日本語におけるガ行鼻音の実態と共通語としての地位』『日本方言研究会第69回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会
- 永谷 修（1987）『地方で出現するガ行鼻音』『言語生活』429、筑摩書房
- 虫明吉次郎（1982）『岡山県の方言』『講座方言学8—中国・四国地方の方言—』国書刊行会
- 安榮京子（1978）『ガ行鼻濁音について—現代若年層の発音の実態』『玉藻』14、フェリス女学院大学国文学会
- 朴 成媛（1989）『標準 日本語教本1 改訂増補版』進明出版社（韓国）
- Jorden, H. Eleanor（1963）*BEGINNING JAPANESE Part 1*, Yale University Press
- Rodriguez, P. João（1604～1608）*Arte da lingua de Iapam*, Nagasaki（邦訳：土井忠生（1955）『日本大文典』三省堂）

#### 【辞典】

- 『日本語アクセント辞典』（1951）日本放送協会編、日本放送出版協会
- 『日本語発音アクセント辞典』（1966）日本放送協会編、日本放送出版協会
- 『NHK 編日本語発音アクセント辞典 改訂新版』（1985）NHK 編、日本放送出版協会
- 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』（1998）NHK 放送文化研究所編、日本放送出版協会
- 『角川外来語辞典』第2版（1978）あらかわそおべえ、角川書店
- 『基本外来語辞典』第3版（1995）石綿敏雄編、東京堂出版
- 『現代ポルトガル語辞典』（1998）池上岑夫ほか編、白水社
- 『國語発音アクセント辞典』（1932）神保 格、常深千里編、厚生閣
- 『コンサイスカタカナ語辞典』（1998）三省堂編修所編、三省堂
- 『全国アクセント辞典』第26版（1989）平山輝男編、東京堂出版
- 『明解日本語アクセント辞典』第2版（1982）金田一春彦監修・秋永一枝編、三省堂
- （本学専任講師）